研究ノート

大隈言道研究
年譜編第Ⅰ部

進藤　康子

要旨

江戸時代後期の博多の歌人大隈言道（おおくまことみち）は寛政十（１７９８）年生まれ、慶応四（１８７６）年没、七一歳。先祖は清原姓で、天武天皇第三皇子舎人親王の子孫であることを誇りとし、家集『草径集』には、清原言道とも記す。黒田藩士二川相近（ふたがわすけちか）のもとで、書や和歌を学ぶ。家業を弟に譲り、専ら和歌の師として福岡今泉の自宅「ささのや」にて門下歌会を開き活動する。日田の広瀬淡窓にも師事する。『草径集』を出版するため大坂に登り、そこで緒方洪庵、萩原広道、中島広足、広瀬旭荘らと交流する。門下には野村望東尼など。本稿において、門下歌会に於ける添削指導の実態を明らかにし、門人への書簡資料や、新たに見つかった月ヶ瀬の宿帳の資料等から類推できる大坂での活動を新出資料として示した。また、言道の歌集出版前後の歌稿資料や、『ひとりごち』『こぞのちり』などの歌論をもとに、年譜形式で言道の事蹟を記し、文事を顕彰、言道の年譜を足掛かりとして、更に幕末歌壇の動向と展望を知る基礎資料として示した。

キーワード

大隈言道・野村望東尼・広瀬淡窓・草径集・香川景樹・ひとりごち・こぞのちり・二川相近・ささのや

凡例

一　本稿では、大隈言道の墨蹟資料を中心に年譜を著した。猶、新出資料と、管見資料に基づき諸先学の研究も出来得る限り示した。

一　言道及び言道門下の入集撰集に関しては、その刊行年、序文、跋文などから最も早いと思われるものを選び記した。

一　歌集歌稿手紙等の原資料の引用に際しては、必要に応じて現行のものに改めた箇所や、句点読点、濁点を付した所がある。

一「○」は、言道の活動および言道の作品を、「◇」は言道と関連の深い事項、人物などの参考事項をそれぞれ示した。
（特に注目すべき言道の新資料には●関連事項は◆を付した）

寛政十年　戊午　（１７９８）　一歳

○福岡薬院の抱え安学橋に、言道生まれる。

○大隈言道の家系・事跡を窺う基礎資料として、言道自筆の『清原姓大隈氏系譜』（九州大学中央図書館蔵）と、同じく言道自筆の『大隈氏系譜略記』（同）がある。

『清原姓大隈氏系譜』によると、言道は、天武帝第三子、舎人親王の子孫。言道の祖父、清助の時、黒川村から、那珂群赤坂に住み、その後、福岡薬院町抱え按学橋に居す。父は茂助言朝、母は、信国又左衛門光昌三女。系図、萍堂言道の箇所には、「慶応四年辰七月二九日逝行年七十一。妻は福岡中名島町大熊清次郎女」とある。言道にとって、祖先が舎人親王で、清原姓であったことが生涯の誇りであったと思われ、後に述べる、言道自筆歌集『草径集』の冒頭には清原姓を著している。そして、言道自筆系図の書き入れは、天武帝第三子草壁皇子弟「舎人親王」から始まる。

また、『大隈氏家系譜略記』には、祖先の事、或いは、父母の事に関して次のような記述がある。

「元祖大隈主水助治言は、上座群上寺村居住にて、慶長九年甲辰死去せられたり。法名、教念と云。上寺村一向宗教念寺の開山にて、則法名を以て寺号とす。もとは豊後玖珠郡より出たる人なり。豊後豊前筑後に二十四家と云二十四の旧家あり。其の内より出たる人にて肥後侯の家老内にも同名有り。皆長野姓なり。大隈は豊後玖珠郡大隈より出たる自称なり。本姓長野と知るべし。」

「言朝、書は唐人町田浙江一の弟子にして、おのれらの及所にあらず。其の外俗事にいたりても、博多福岡の質屋中の定めも町役場に願出、懸礼などありしは言朝の功也。」

「町役場の質屋の記録亡父の筆の物沢山あるよし、書よろしければ、町役場の吟味役新藤三郎、亡父の書類を取出し、宅にて手習いせられしこと、新藤直はなしなり。」

「梅沢利平の母は、おのれの母の第一姉。第二は帆足弥太夫の母。第三家母言朝の妻成。梅沢の母わが叔母にて幼少より書をよくし、学問あり。いまだ京画起らざる前に南蘋風を書かれしは、叔母と越後屋行蔵成。画を書、清人沈南蘋の弟子成。書の師誰といふことなしといへども、亀井主水いまだわかかりし時、常に出入りせられしといひし、此人にや。南冥先生ある時いづこにてか叔母幼名ノブ十二歳の比、八畳敷計の龍と云う大字を砂の上に書かれしを、二川相近先生、をさなかりし時見られしよし、先生のすぐ物がたりあり。叔母書きし屏風飯塚にても見しこと有り。古き屏風などに、毎度叔母の手跡はりまぜなどに見ゆるを見ればなつかしき事ども なり。」

とある様に、亀井南冥や二川相近などとも、家族ぐるみの付き合いがあったこと、また、父言朝が書の名人であった事がわかる。また特に、注目すべき点は、母方は博多で有名な鍛冶屋、つまり刀匠であった事が言道の手により記されている。

加えてその関係部分を以下に示す。

「此三女の親は、信国又左衛門光昌、則わが母方の祖父にて近代カジノ書カヂ考などにも記しあり。三女のみにて相続の悴なかりしば、弟子の内より相続を立、別家させられしは則、博多信国也。祖父光昌上京の時連れられし信八と云う弟子あり。百鎌斎哲翁居士とあり。その脇に帆足弥太夫の母の墓あり。又満昌の兄信国大和守の墓あり。此大和守は隠居して俳名を江棧とよぶ。京師にすみ、かぢなりけるに、折節勅命にて仙洞御所御剣を鍛はせ給ふ。今の世にはあるべからずめづらしきことなり。福岡にて死去せられしかば、今の名だかき加賀の千代より追悼の短冊あり。そのたんざく梅沢方にあり。江棧辞世の発句、『うれし〳〵そのやくそくの時鳥』むかしの墓は石質あしくて磨滅せしかば、梅沢利平再建して、左右庵紅棧の墓あり。この安国寺に叔母信女の墓あり。梅沢加太夫の妻なり。」とあり、言道の母方の父は、信国又左衛門光昌となり、有名な刀鍛冶であったことがわかる。また、この記事から、新たに、大内初夫氏によると、右の「江棧」が、『諸九尼句集』の詞書きに登場する不明の俳人「筑紫御房」であることを突き止められ、次の様に記す。（「国語国文薩摩路」30・31号）

右の「此三女」は、言道の母の三姉妹を指す。それは、梅沢利平の母（梅沢加太夫の妻）と、帆足弥太夫の母、言道の母（大隈言朝の妻）の三人である。そして、この三姉妹の父が信国又左衛門光昌であり、したがって光昌は言道の母方の祖父に当たる。又光昌の兄が信国大和守で、俳号江棧である。以上により、「系譜略記」によって江棧が言道の母の伯父であることが判明する。

筑紫の刀鍛冶信国一統は京の刀匠信国に出、その末流の定光という者が応永頃に豊前宇佐に永住し、この子孫が九州一円なかんずく豊前・豊後・筑前に繁栄し、新刀期ニ》は言った信国一派は断然を圧したという。

その系統は、信国安俊―信国吉貞―信国俊寿―信国光昌　ごとくなっている。

また、江棧の産地は福岡なので、住地を多く「福岡」と肩書する。しかし、『佐夜の中山』（寛保二年）には「秋月連中」の中に見え、又、『屋土里塚』（同三年）『雪の尾花』（延享元年）『松の中』（同三年）等にはいずれも「秋月」と肩書があるのは、この頃一時秋月に住していたのであろうか。そしてこれは江棧の先々代の信国安俊が秋月出身であることとおそらく関係があろう。

と指摘されている。また、板本が九州大学支子文庫に所蔵されている『高津野翁二十五回』（野坡の二十五回忌集。直方の文雄序。奥書、明和四亥のとし秋九月）は、施主の江棧は、

「一集を編て師恩に酬ひ奉らんと」したが、年頃の病気がやや悪化

したので、九十九庵を辞して郷里福岡に帰り、かくて病床にあること三年にして明和四年初夏に死没した。江棧は臨終の際までこの集のことを思いわずらっていたので、没後「はらからなる人」が枕もとに残した草稿を集めて京の文下に送り、編集のことを依頼したものという。

この「はらからなる人」は、『其郭公』の巻頭に江棧の「うれしうれし」の辞世句に「露ゆりこぼす竹の若枝」の脇句を付けている「月指」がその人であろう。月指は同集に発句

一声は法のこたへかほとゝぎす　信国氏　月指

が入集しており、江棧の弟の信国又左衛門光昌がこの「月指」であろう。

との注目すべき新たな発見となった。

寛政十二年　庚申　（１８００）　三歳

○言道弟清右衛門言則生まれる。

「清右衛門言則一博多に住す。嘉永元申十二月二五日逝。法名古竹有声行年四九歳。妻は博多川端町久作女。」『清原姓大隈氏系譜』

寛政の末

●教念寺に大隈一族集い、父言朝も一座に連なる。

○「寛政の末つかたにやありけむ、おのれが亡父言朝、かの上寺村にいたりて、主水助治言（前述の「元祖大隈主水助治言は、上座群上寺村居住にて、慶長九年甲辰死去せられたり。法名、教念と云。上寺村一向宗教念寺の開山にて、則法名を以て寺号とす」参照）の二百年忌にあひたるに、かの教念寺より豊後豊前筑後などの一族同名に回章をまはしたるに、二百五十何人とか皆きたりて、教念の二百五十年忌訪ひたりしに、亡父言朝もまじりて一座つらなる。」『大隈氏系譜略記』

○「治言一曰長野主水治言。少納言通雄。天延元年七月、御札削解官。宇多天皇御世、寛平二年庚戌、下國配流豊後國。自通雄以来至治言数世、居于豊後國玖珠郡大隈村。（中略）永禄之頃亦移居筑前上座郡上寺村。」『清原姓大隈氏系譜』

文化二年　乙丑　（１８０５）　八歳

○父言朝死。四十三歳。

「五月四日、言道の父清助言朝没。年四十三．福岡薬院香正寺に葬る。」『大隈言道翁傳』（梅野満雄著）

○この頃、二川相近[二]入門か。

「言道が相近の許に入門せるはこの頃のことか。兄言愛は当時既に相近が櫻楓堂に通学す。」『大隈言道翁傳』[三]「家系及び一族」

○言道が相近塾に入門した時期は正確にはわかっていないが、当時の入門の慣例や、兄言愛も通っていたことから、七、八歳の頃必然的に入門したと推測される。

「翁（言道）が二川塾入門の年時は、当時の入門簿なき為め討尋の余地なく（中略）七、八歳の頃より、兄（言愛）に伴われて通学せられたのではあるまいか。蓋し如上の推定は、当時入門の舊慣年齢、並に翁の舊居安学橋より、桝木屋町なる相近塾までの距離約十四、五町餘を加考したものである。」『大隈言道翁傳』「幼時と修養期」

○言道とその師相近の関係は、二川瀧三郎の次の様な記述で知る事ができる。

「本来大隈家との交渉は言道のみに限らず、言志、言足、言苗等の人々及び同家女性も、或は、書、或は和歌など、相近以来習学してゐまして格別親密の間柄であったことは、相近長女鶴子の記録にも言道が毎年雪見に来しを、相近没年に来訪せざりしとて、之をかこちたる左の歌杯にてもその間の消息は伺われます。

としごとに雪のふりければ　ことみちが　ゆき見に、とてとひしか。ことしもこぞのよふに雪のふりけれど、ちちのおはしまさね

ば　とはざりける　物ごとにつけて　ありしをしのびて　かなしうなんおもひ侍りて

雪見にとゝひこし人のおとづれをまつたよりなき宿にも有かな

こそて雪見にとひし人さへもとはずなりぬる宿ぞかなしき

とありまして、言道は相近歿前迄は相当訪問していたものらしく思われます。」

『二川相近風韻』四

文化三年　丙寅（１８０６）　九歳

○兄言愛没。十九歳。

「茂甫言愛　十九歳歿」『清原姓大隈氏系譜』

「十二月五日、兄言愛歿す。年十九」『大隈言道翁傳』（梅野満雄著）

○野村もと（野村望東尼）生まれる。

天保三年　壬申（１８３２）　三五歳

○この頃から、言道、歌を教え始める。

「歌まきをつくりて　人の歌のよしあしをいふこと　はたちあまり二とせ三とせにやなるらむ（中略）おのれがつたなきのみにもあらず　むかしの歌の歌まねのみにて　いづれも今まで年ふることいと久しければ（中略）たけたる人よく見わかちて　この道いやましくさく花のごと　世に傳はれかし

安政二年八月一日　　大隈言道しるす」『詠草　文月の巻　奥書』（『大隈言道翁傳』）後述、安政二年の項で、序の全文掲載参照。

この奥書に於いて、安政二年八月一日付けで、「はたちあまり二とせ三とせ」前に、「歌まきをつくりて　人の歌のよしあしをいふ」ことをはじめたとの記述がある。逆算すると二十二、三年前といえば、天保二、三年頃で、言道三四、五歳から、和歌を教え始めたことがわかる歌稿資料である。

「歌まき」というのは、月ごとに、月次歌会を開き、門下生の歌に点や朱比をつけていくのを筆録者が筆記し、最後に言道が清書してそれを歌会の最高得点者の賞としたことを言う五。現存している歌巻は『葉月左之巻三巻合撰』『霜月之巻一三合撰』（いずれも福岡市博物館蔵）や『仲秋巻一』（九州大学図書館蔵）がある。『文月の巻』は、梅野満雄の著書の中で、書名と序の引用部分を知るのみで、今は現存しない。

天保四年　癸巳（１８３３）　三六歳

●野村新三郎貫貞六とその妻もと七が、言道に入門。

●今まで、野村望東尼に関する多くの論文や、『望東尼歌文集』佐佐木信綱編（明治四四年十一月六日刊）、『大隈言道とその歌』佐佐木之信綱編（大正十五年五月十四日刊）、『野村望東尼全集』佐佐木信綱編（昭和三三年四月十五日刊）、福岡市立歴史資料館の『招月望東禅尼遺品目録』（昭和四八年十一月五日刊）までが、貞貫ともとの言道入門時期を天保三年としているが、根拠が無い。強いて資料を求めるとすれば次の二点の資料が考えられる。一点目は、望東尼が言道入門と同時に書き始めた『向稜集』八（福岡市博物館蔵）である。

『向稜集』の、一番最初の詞書に、

言道大人をわがうたの師とたのみし時、うひによみたりしとしのはじめのうた

とあり、言道に師事した年は記していない。十三首目の詞書に、

すた何かしのいへをつかせけるわが子のつまにさだまりけるむすめが、天保四年の八月五日に、ゆくりなくみまかりて、あくるとしのそのよに

と、はじめて「天保四年のあくるとし」と記している。これらから、『向稜集』の書き始めを、天保四、五年からと想定。言道への望東の入門もこの時期であるとすべきであろう。しかし、天保三年の根拠は歌の内容からも認められない。当時言道の入門簿もなく、望東尼も『向稜集』以外で年代をはっきりと記したものはなく、天保三年説は、佐佐木信綱の発言を、後人がそのまま踏襲したものと考えられる。

二点目は、『野村望東尼傳・獄中記　夢かぞえ』（小河扶希子編）で、望東は言道入門前に、先ず二川相近に入門しており、相近が門を閉じたのが、天保三年頃とし、「天保三年、二川松陰、門を閉じ、同門の商人（質屋、酒屋）で歌人・大隈言道に夫婦で門下となる。『向稜集』詠みはじめる」としているが、これも根拠がはっきりとは示されていず、推測の域を出ない。

しかも、『二川相近風韻』の「二川相近年譜」には、

「文化三年　四十歳、　十一月母死去。冬、母を偲ひて　おろかなる身をいかにせんたらちねに涙はかりを手向けにはしてこの頃より相近、終生家門を出でず。」とあり、相近が自宅に引き篭った時期が『野村望東尼傳・獄中記　夢かぞえ』とは、かなりのずれを生じている。

以上のことを考え合わせて、やはり、天保三年説は認めがたく、『向稜集』の記述より、言道入門は、天保四年以降となる。

○五月、『やまさと和歌集』（石松元啓編・二川相近序）成る。言道二六首入集。藩内の百三十三人の歌が、相近の弟子、石松元啓により編纂された。歌数五〇一首。相近の序を伴う。この序には相近の歌に対する姿勢がよく示され、後の言道の歌論への影響は計り知れないと思われるので、次に翻刻する。

うたは思ふことをのぶる物なれば、こゝろのまゝに
いひいつるぞ、うたのもとなる。さればそのおもひ
によりて、しらべのあかれるも、くだれるもあるべし。
また、ことばによりて、きこゆるも、きこえぬもありぬ
べし。なかごろうたあはせてふことのありし
より、こなたは、こゝろにおもはぬことをしゐてよみいで
つゝ、ひとにかたんとせしわざこそ、いできたれば
ことはもあやにいひなして、ことやうなるわざもあ
るぞかし。されば、おもひをのぶるは、よそになりもて
ゆきてたゞ人にめでゝられんとし、ひとをおどろ」一・オ
かさんとするがうた人のわざとぞなれりける、ほい
なきことになん、よゝのうたを見てしらる。されど
人のこゝろまことなるものになれば、またおのづ
からにおもひのままなるも、そがなかには見ゆる
ぞかし。これまた世々の歌をみてしらる。また
あまたよむを、おのが功とせしことも、人にかたらん
となせるわざになん、慈円僧正の一時百首詞
書などを見てしるべし。かあゝるわざは、保元平
治のみだれよりこなた世にもしづかならず。ひと〳〵
たがひに心をよせてひたふるにかつことをこのめ」一・ウ
ればなるべし。元和の大御世よりこなた世も
らけく御めぐみもたみくさにあまねくなり
はじめにいへるならはしをうけて、ありのまゝに
いへるは、おさなきわざのことおもふ人のはべれば
よにふさはしからぬもありぬべし。そのめ
づらしきわざは人々のさえによりていできたる
ものなれば、おしなべての人はさとりがたきもあ」二・オ
らんかし。わがともなる、いしまつぬし、大かたの
うたよまぬ人らのもさといやすきうたどもを
きくがまに／／かひつめて、山里歌集とは名に
おはせたり。こはかしこかれとわが
君の山よりつゝく里は、ふくをかときこえ
たまひしをもてものせしとぞ。大宰府には
わが君のものたせ給ひし万葉集をおさめまたある
人の家には玄陳かかきて奉りし歌詞のふ」二・ウ
みなともはべれはこの歌よむわざはわが
君の御心にもかなひてんかし
天保さつき二川相近しるす」三・オ

（九州大学図書館蔵）

この序は、相近の和歌に対する「うたは思ふことをのぶる物なれはこゝろのまゝにいひいづるぞうたのもとなる」という見解がはっき

りとあらわれている。言道はこの主張を摂取し、『ひとりごち』の「自が誠忠よりふと言ひ出るなれば、自然の物といふべし。其孤言（ひとりごち）則ち咏差なれは歌なり」と述べ、心の中でひとりごとを呟く様に、自然と沸き起こってくる言葉のそものが、その人本来の歌なのだという考えとして受け継がれていく。

また、言道のこの頃の歌は、ほとんど残っておらず、この歌集『やまさと和歌集』からは、言道の古典模倣の頃の歌や、模倣から脱して和歌革新を目指し始めたであろう歌も採取できるので、二六首全て左に記す。

1 花のえになく鶯のこゑそひぬおのか友をやさそひきぬらん
2 あさな／＼きなくうくひすなかぬ日は友こそいとゝこひしかりけれ
3 わかひとりかよふはかりになりにけり春草おふる池のつゝみは
4 春雨のはるゝまに／＼もゝとりの声もこほしくなりまさるかな
5 たゝなはる山もかひなしかりかねのことそともなくこえていぬれは
6 世のうさを思ひいつへくなる時にさける桜は見るへかりけり
7 わかせこか衣春雨ふりいてぬぬれなは花とともにぬれなん
8 里ことにゆきてしみれは春ふかみゝなこのもとに花はちりけり
9 木のもとにちりぬる花は人しれす今宵の雨になかるへらなり
10 わかさしゝ庭のうの花もゝえさしいつしら波と人に見えまし
11 おきいつる朝けのまゝにすゝしきは苔むす宿の庭にさりつる
12 花すゝきたゝひともとをうゑしより庭はのへとも見えわたるかな
13 あはれわかよにふるほとはさやけさの今宵の月にかはらすもか
14 月影のかたふくまゝにこほろきの声もひさしくなりまさるかな
15 聞まゝにもの悲しくそなりにけるめつらしかりしはつかりのこゑ
16 ことしおひのそのふのはちのいちしるくあさちか中に紅葉して
17 あさきりのはれてしみれは紅葉ちる秋山ちかく我はきにけり
18 やまのははけふしも雪となりなましくれのひまにとひこわか
19 せこ
20 かれふして波にひたせるまこもにも此暁の霜はおきけり
21 さひしらにをしそ鳴くなる紅葉もなかれはてたる山川のせに
22 わかゝとの木立にさへて見えさりし遠山のはは雪ふりにけり
23 ちりはてん物ともしらてみのむしの秋のこのはに猶すかるらん
24 我よりも後に生にし姫小松かけふむはかりいつなりにけむ
25 君とはすなりにし日よりさひしきはひとりすゝきのまねくなりけり
26 山川のきよきあたりにすむ人は千代ともしらて千代やへなましひはりあかるそろをしみれははてもなし君かよはひもかゝれと思ふ

『やまさと和歌集』（九州大学図書館蔵）

以上より、言道の初期の作品を見ると、古典の物まねから脱し様とする兆しがみられる。とくに、22番歌や24番歌などは、言道の和歌革新への、覚醒後に頻りに作られた作風へ通じる。

この歌集には、後に言道と人気を二分する事になる藤田正兼や、相近の師、青柳種麿（種信）、竹田定直、仙涯禅師らも名を連ねており、相近の人脈の幅広さを知る事が出来る。九

天保六年　乙未（1835）　三八歳

○三月、『徒然集』成る。全歌数四一首、二川相近編、言道清書、作者は言道も含めて八名。相近門下の親しい人々の中から、相近が選んだ。言道の歌は七首入集しているので、次に挙げる。このうち、先に挙げた『やまさと和歌集』と重なる歌もあるが、言道の場合は重複していない。

①たちいづる小まつがはらぞめづらしきふゆごもりしてほどをへぬれば
②はるがすみへだてるけさはやまもなしかぎりもわかぬのべと見へつゝ
③さくらちるころにしなればいほのとをひらきもあへず人ぞ問ける
④きのふけふこゝらの花もちりしかどこずゑのいろはかはらざりけ

り
⑤みがくれにふゝみしさはのかきつばたよのまの雨にさきいでにけり
⑥このまよりにはに移ふ夕ひかけ秋のいろにもなりにけるかな
⑦たびにしてふるさと人をみるときはわかたらちねにあふこゝちする

『徒然集』　（九州大学図書館蔵）

天保七年　丙申（１８３６）　三九歳

○八月六日、清左衛門言則に家業を譲り、今泉に隠棲する。「ささのや」と呼んだ。
○「天保七年さるの年八月六日、弟に家を譲り今泉に移る。
○言道江戸へのぼる。其の理由は定かでない。
○九月二七日、二川相近没。七十歳。（二川家系略譜より）
○言道は江戸にいて、相近の死に目にあえなかった
○十月、『天保八年言道自筆歌軸』（仮題）歌数八三首（佐伯家蔵）成る。
　巻子仕立で、無題。天保八年冬十月　言道并書」と識す。一〇

天保九年　戊戌（１８３８）　四一歳

○天保九年九月晦日、言道、相近三年忌に、追悼の歌を次のように詠んだ。

　二川の大人みまかり給ひて今年三とせになり給ふをいたみて、おのが知れる人どち、こなたかなたにつどひて歌をなしものにするに、すべてまだしき人々なれば、よからぬも侍るめれど、此のままにうちすてなんもほいなしとて、かくかいつめて御前に持ちささげまつるみ心もましまさば、めでさせ給ふべし。
　　天保九年長月晦
　きみがうゑしにはの楓のいろづけばわかれしころになるぞかなしき
　二川のうしなくならせ給ひしころは江戸に侍りけるに、今年三とせにならせ給ふとききて
　いつのまに三年へにけんあづまにて驚かれしはけふにぞありける
　　み筆のあとを見て
　いますかと思ふはかりに見いるかな君が見筆のみとせへぬれど一一

言道がどのような理由で江戸に滞在していたのかを裏付ける資料が未だなく未詳である。

○十一月、『新泉日記』一三八首成る。〔佐伯家蔵〕言道自筆歌集。巻子。外題、内題ともに「新泉日記」。箱書きがあり、裏に言道の自筆で「天保九年戊仲春大隈言道書」とある。言道は、この二年前の天保七年八月に家業を弟に譲り、歌に専念するために、薬院から今泉の「ささのや」に移り住んでいた。心機一転の気持ちの顕れとして、つまり、新生の第一歩として今泉に移り住み庭の池に新たに水を引いた記念であろう。一二
言道の後記を次に記す。

　右のうたどもはこのひとゝせふた
　とせ時にふれてよめるもあり。また
だいをいだしてかなたこなたにて
よめるもあり。きこえぬうた、とゝの
はぬうたあるめれど、ゆきのうちの
つれ／／に、たゝかきにかきたれば、
かきたがへもあるべし見ん
人とがめ給ふべからず

言道

　この言道の記述「右のうたどもはこのひとゝせふたとせ時にふれてよめる」より、ささのやに移ってきてから一、二年の間に詠んだ歌を、「つれ／／に」集めてみたことがわかる。
　言道は、この頃から、ささのやに於いて頻繁に門下歌会を開きはじめていた。よって、「きこえぬうたとゝのはぬうたあるめれど」「人とがめ給ふべからず」と謙遜の言葉の裏に、歌会指導者としての自信があってのことと察せられる。

天保十年　丙申（１８３８）　四二歳

○四月八日、言道、日田咸宜園の廣瀬淡窓に入門する。
「筑前人大隈清助入門。居鍛冶屋[一三]」『醒斎日暦』[一四]の、天保十年四月八日の記事として、淡窓は言道入門を記録している。

ところが咸宜園の『入門簿』続編巻五には、「天保十巳亥四月十日」付けで

筑前福岡　　大隈清助　　四二歳
入門　　天保十巳亥四月十日
紹介　　廣瀬　信平[一五]

と記録され、梅野満雄の『大隈言道年譜』は、この『入門簿』の方の日付を採っている。しかし、実際は、淡窓の記録の日付で入門している。入門の際の手続きなどで記載が遅れたのであろうと思われ、「四月八日」入門としたい。紹介者の廣瀬信平は、淡窓の弟で、藩のご用達であったので、商人の言道とは親しい間柄であった。

咸宜園に、四二歳という年齢での入門は異例であったので、歌人として一家を成していた言道にとっては、淡窓から学ぼうとしたのは、淡窓の幅広い漢学の思想であったろう。そして、漢詩の造詣を深め、自分の学問を、ひいては、模索中の歌論の根本思想を再確認するための入門ではなかったか。

○四月二十日、塾の月旦評の行われた時、言道は客席に待ったことが『醒斎日暦』からわかる。
また、『扶桑会雑記』[一六]（小金丸金生[一七]）によると、「翁ある時、筆のすさびに書出られたる文の机上にありしを淡窓見られて、其才の優れたるを知り、それより後は、別間に置きて客人の如くもてなされた」とあり、言道は来賓扱いとなったことがわかる。

○五月二日、言道、咸宜園を去る。
『醒斎日暦』には五月二日の記事に「清助告別」とある。

○この頃、歌論『こそのちり』[一八]を記す。

○この頃、『笠山集』[一九]成る。大本、写本、四巻四冊。八八四首。天保三年から天保九年までの言道門下歌集。作者は、言道、野村貞貫、野村もとこ、佐伯常貞など五十名。編者不明。佐伯常貞が筆録、編集か。（佐伯家蔵）

天保十一年　庚子（1839）　四三歳

○四月、『春野集』谷川本[二〇]（桑原氏蔵）言道自筆歌集。巻子。箱底に「天保十一年子四月　大隈言道并書」とある。一三三首のうたすべてが、天保十年春に詠まれたことが、奥書によって知られる。天保十年はおりしも淡窓に入門した時で、田代から日田に向かう途中の歌もある。奥書に「天保十一年四月　大隈言道　谷川幹辰[二一]ぬし」と書かれ、谷川幹辰に贈られたことを示し、谷川本と呼ばれている。奥書部分を次に挙げる。

おのれがともなるたにがはぬしは
はやくよりうたのみちにいりて
よく物せられしかど、つかへの道
いとことしげくて、なみ／＼の人
ならばいかでとおもひ侍るを
をりにふれ、ことによりて、物せ
らるゝうたのいとをかしくあは
れに、たくみに、いといとまおほき人
のわざにもおよぶましう、いかで
かくまでには、と、おもふばかりになん。
さてかくものせらるゝまに／＼、おの
れがうたをもこはるれば、つたな
き物から、こぞのはるよみいでたるうた
どもをかいつめて、見せまゐらす
よからぬうたのおほきは、いふもさら
なれど、そを撰びすてゝはのこる
まじう思ひ侍れば、何のわかち
もなくかいつめ侍る。このみち
よくしれる人のおのれがほどを

しりて、一うたにてもあはれと
みたまはゞ、いかばかりかうれ
しからむ　　天保十一年四月

大隈言道

谷川幹辰ぬし

伊東尾四郎は「春野集は天保十一年、谷川幹辰に書き手与えしもの、天保十二年山鹿良甫に与えしもの、及び小林重治に与えしものなど数通あり」と「筑紫史談」第十五集において、書名の報告されていたが、所在は確認されていなかった[二二]。「春野集」の諸本を便宜上、「谷川本」「山鹿本」「小林本」として区別する。

天保十二年　辛丑（１８４０）　四四歳

●四月、『春野集』山鹿本、一二一首。（山鹿氏蔵）。言道自筆歌集。巻子。箱底に「朝倉住山鹿昌成蔵」と書かれている。言道が山鹿良甫に書き与えた歌集。歌は「谷川本」より十二首少ないが、すべて一年前の「谷川本」の重複歌である。奥書には、この本の成立の経緯がわかるので次に挙げる。奥書の内容も谷川本と重なるところが多々ある。

わがおしえこたにかは幹辰
としころうたをよくよみて
いとをかしき人なれはこの
まきをかきてつかはしけるを
こたびやまがぬしがもとめ
にまかせて、おなじうたを
ものしておくらんとするに、
すべてこそのひとはるのうた
にずあれば、いとにたりがはしく
よきうたすくなく、こと／＼し
くのものせんも、いかゝなれど、
しひてこはるゝにまかせ
ぬれば、このみちよくしれる人
おのれがほどをしりて
ひとうたにてもあはれと
見たまはらばいかばかりか
うれしからん。すべて
うたはやすくすらりとよま
ては、まなびえがたく、万葉
古今などのすがたをよく
よみとれりと見ゆるうたは、
なか／＼に、万葉古今など
にいとちほさかるうたと
こゝろ得へし。今の人
よくいにしへを学びえたらん。
人は、いにしへになか／＼たが
へるさまこそ、いでくべけれ。
人まろ、赤人のうたに、貫之
みつねのうたはにず。つらゆき
みつねのうたに、定家、家隆
のうたもにず。これにてさ
とるべし。今の世に、古言家
とてすがたのみいにしへに
にせてつくりいたせそと、それ
ならば、貫之、定家、今の人
にはおとりたまはんや、おの
れとても、今の人なみには
つくりいだすべし。されど
あまたとしこゝろみて
わがうたをよまんのこゝろ
より、かくなにともなきうたを
よみいづることなり。なにとな
けれど、こゝろおくれたる人の
こゝろうべきゝはにあらず。
つばらには筆にはかきがたし

天保十二年四月　　大隈言道

山鹿良甫[二三]ぬし

「谷川本」の奥書「おのれがともなるたにがわぬしは」を、「山鹿本」では「わかおしえごたにがは幹辰」と言うように「友」が「教え子」に微妙に変化している。これは谷川幹辰に気を遣ってのことであったろう。また、「こぞのはるよみいでたるうたどもをかいつめて、見せまゐらす。よからぬうたのおほきは、いふもさあなれど」が「こたびやまがぬしのもとめにまかせて、おなじうたをものしておくらんとする」と山鹿本作成の経緯を改めて断った上で「こぞのひとはるのうたにしあれば、いとみだりがはしく、よきうたすくなく」とほぼ同様の内容を記している。

そして、「このみちよくしれる人おのれがほどをしりて、ひとうたにてもあはれと見たまはらば、いかばかりかうれしからん」とほぼ同文を記し、弟子に対して低姿勢ながらも、自信の程がはっきりと伺われる。わかる人だけがわかればいい。我が歌を真に理解する人だけが、この歌集をよしとしてくれれば良いとの心情がよみとれないだろうか。

なぜなら、奥書後半「うたはやすくすらりとよまてはまなひかたく」以降は、論調もかわり、師としての自信がはっきりでている。まるで、良甫に歌の心得を諭すように、天保十年頃記した歌論『こそのちり』の理論をここに述べており、入門して間もない門弟、山鹿良甫に、わかりやすく説いたものと思われる。

●言道、草摺りを好んでつくり、それに歌を書いた。『雑葉歌帖』[二四]はこの頃か。序文を次に記す。

桜　楓などのめでたきは言ふもさらなるを　山賤の垣根の草木なかなかにをかしくて
朝夕に取り見るにあはれならずと言ふものなし。木の芽摘む木のその花さへ香はしく、鳥もすさめぬ小瓜も払ひ捨つべきものとも覚えず。
この秋の末つかたもの寂しさに紙になど摺りてもてあそびけるを、伊勢人藤田長年が見て、強いて乞ひけるままに、歌さへ書き添へて遣はしけるを、こたびおのれにもと　言ふままにことごとしけれど、また物して取らす。
もとより戯れなれば、いかにぞや思ふこと有りとも、見む人許させ給へかし。

○「天保十二うしの秋、家のめぐりに、ありとある木くさの葉を紙にすりて、それにうたをかきつけけるを、二巻となしてをしえ子徳永ぬしにとらす。」『ささのや集』[二五]
この『ささのや集』で言うところの歌帖は、この『雑葉歌集』の事と思われる。
○『ささのや集』この秋以降成立か。所在不明。

天保十三年　壬寅（1841）　四五歳

○三月十九日、廣瀬淡窓、言道の「ささのや」を訪ねる。
○淡窓の『進修録』[二六]巻三、によると、淡窓は「三月八日筑前に赴く。昭陽の墓に謁し、且つ、大賀甚之允と遊ぶ。四月六日日田に帰る。」とあり、亀井昭陽の墓参の為に筑前に来ていて、そのついでに、十一日後の三月十九日、言道のささのやを訪ねたのであった。
○淡窓の『懐旧楼日記』巻四五によると、天保十三年三月十九日の項に次のように記されている。

十九日、大隈清助が招に赴く。清助は歌人なり。昔年暫く予が塾に寓せしことあり。（中略）遂に清助が家に至る。清蔵、尚庵、亀年もまた来たれり。饗応あり。夜に入りて帰れり。清助名は言道、其宅園亭頗る雅致あり。予詩あり曰
卅一言歌自作家
幽居風景亦清嘉
短籬影蕉十酉平池水
蜀帝花交燕子花

また、『遠思楼誌鈔』にも、右と同じ詩が、言道の庭の趣を褒め称え言道に与えた詩としてでている。「ささのや」を訪れた折の淡窓の詩に、言道への賞賛の心が読みとれる。
○白石俤三氏穴山健氏によると、『遠思楼誌鈔』は、推敲されている

という。観魚荘の言道遺墨の中に、淡窓が書き与えた折の詩は、その折の実感がこもっている。推敲前の初案を次に示す。二七

卅一歌風自作家園多幽
趣亦堪誇短雛陰影蕉＋酉平
池水杜宇花交燕子花
春晩過大隈君幽居

廣瀬建拝

淡窓先生むかし芽屋をとふらひ給ひける時いけの燕子花垣のつゝしなとさけりけるをことにめてゝつくられたる詩也
　この詩遠思楼詩集にも見えたりこの詩を見れはその時のさま今もおもひいてゝ見るかことしされはかくもにして此にのこしおくものなり

安政四丁巳浪花にして大隈言道

〔つづく〕

校註

一　中牟田浙江「文政中ノ人　俗ニ　一ニ浙江　二ニ曇栄　三四カ無クテ　五南冥ト云フ」『筑前名家人物史』（森政太郎編　昭和五四年刊）

二　明和四年（一七六七）十一月、黒田藩の御料理人頭格であった枡木屋町（現在の唐人町）に生まれた。松陰と号し、通称を幸之進といった。幼くして亀井南冥に師事して、甘棠館に学び（中略）専心書道の研鑽に励み大師流その他の書法を学び、二川様を創始して、「執筆法」を著した。国学を田尻梅翁・青柳種信に学び（中略）今様に巧みで「鴫のはねかき」の遺稿がある。文化三年頃から門を閉ざして不出門のまま、天保七年（一八三六）九月二十日没。行年七十歳。墓は大手門二丁目、園応寺にある。『招月望東禅尼遺品目録』（福岡市立歴史資料館）

三　『大隈言道とその歌』（佐々木信綱・梅野満雄編）所収。大正十五年刊。

四　二川瀧三郎編昭和十一年刊

五　進藤康子『言道の月次歌会「まとゐ」をめぐって―付翻刻九大本『仲秋巻一』（「香椎潟」第四二号参照。

六　安政四年（一八五七）没。六六歳。幼名男久。新三郎。前名貞能。福岡藩士で、録四一三石の馬廻組であった。同藩士浦野重右衛門勝幸の二女もとを後妻とした。和歌を好み夫婦共に大隈言道の門下生となる。

七　野村もと、後の望東尼。文化三年（１８０６）九月六日、黒田藩士浦野勝幸の三女として生まれる。大隈言道の高弟。１８５９年（安政六年）夫貞貫没後、剃髪して招月望東前尼となる。慶応三年（１８６７）十一月六日没。六二歳。

八　天保四年以降から慶応元年までの歌が１６５０首。文久三年の言道の序を伴う。

九　梅野満雄『大隈言道翁傳』に序の部分が紹介（漢字かな混じりに替えて掲載）。穴山健『「やまさと和歌集」「徒然集」』（有明工業専門学校紀要９号・昭和４８年）がある。

一〇　福岡女子短大紀要第四二号（平成十二月三十日発行）穴山建翻刻『（天保八年言道自筆歌軸）』

一一　『大隈言道傳』所収。

一二　福岡女子短大紀要第四二号（平成十二月三十日発行）穴山建翻刻『（天保八年言道自筆歌軸）』・言道自筆『新泉日記』参照。

一三　鍛冶屋とは、当時、咸宜園入門したての者が入る宿舎の名。

一四　『廣瀬淡窓全集』所収、淡窓の日記『醒斎日暦』巻十七

一五　淡窓の弟。伸平。藩のご用達を勤める。

一六　『大隈言道傳』所収。

一七　言道門人。

一八　言道の歌道に関する考えを随筆的にまとめたもの。自筆原本は辛島小四郎蔵であったが、『大隈言道』（佐佐木信綱・梅野満雄共

編）に収められたが、片仮名書きであったものをすべて平仮名にしていまっている。その後、正宗敦夫編『大隈言道全集』上に収めた。

一九　穴山健「翻刻『笠山集』」福岡女子短大紀要第４４号～第４６号参照。

二〇　穴山健「翻刻　大隈言道『春野集』（谷川本）」福岡女子短大紀要第４１号。

二一　言道門人。「もととき」と『向稜集』にも登場する。『鴨川五郎集』にも入集。

二二　桑原氏「春野集」（谷川本）「春野集」（山鹿本）「春野集」（小林本）については後述する。

二三　明治四年十一月十一日没。七二歳。十五、六歳の頃から淡窓の養子青邨に学ぶ。言道門下。代々医者。　『朝倉郡郷土人物史』『杷木町史』による。

二四　田中丸友子氏蔵。文字摺りをすり、歌を書いた歌帖。四九首の歌とそれぞれに草木の画。この後半部分は、他の人に譲ったということで前半部分しか残っていない。『筑紫史談』第十五集、大正六年十一月、福岡で大隈言道翁博覧会が行われたとき、「服紗　四枚何れも模様ありて歌を記入せり。其の模様には植物の葉の形を印せるものあり。翁は文字摺りに趣味を有せしといふ。今回の会には、紙に印せるもの一枚もなきは遺憾なりき」と記されている。これは「服紗」の例であるが、紙に印せるものがこれにあたるだろう。

二五　『大隈言道傳』所収。『ささのや集』は現在所在はわかっていない。

二六　『淡窓全集』所収

二七　穴山健『資料大隈言道遺墨』（「近世文芸　資料と考証」第６号）。